

パンツ

乾いた音が夏の青空に響く。同時に藍華と灯里は地面を蹴って走り出した。

あつという間に目の前に一つ目のハードルが迫る。体勢を低くして風を切るように鋭く跳躍。一つ目は問題なくクリア。続いて二つ目、三つ目。灯里は順調に目の前のハードルを一つ一つクリアしていく。六つ目を過ぎた辺りで灯里は直ぐ横を並走する藍華をチラリと見る。

藍華のフォームは美しかった。流れるような動きで次々と目の前のハードルをクリアしていく。



灯里と藍華の二人は陸上部に所属していた。同じ学年でたまたま

タイムも同じくらいという二人は、なるべくして友人でありライバルであるという関係になっていた。というか灯里には親友という認識はあってもライバルという感覚は持ち合わせていなかったのだが、何故か藍華は灯里をそう思っているようだった。

灯里には他人と競うということがいまいちピンとこなかった。彼女はただ風と一つになって走る、その感覚が好きだけだったから。その灯里に人と競う楽しみ、他人と切磋琢磨して成長する喜びを覚えてくれたのが藍華だった。

ガタンツ